

Title	萬延元年米布見聞に関する報告：福澤先生資料拾遺
Sub Title	
Author	富田, 正文(Tomita, Masafumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.2 (1937. 6) ,p.121(285)- 126(290)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

萬延元年米布見聞に關する報告

——福澤先生資料拾遺——

富田正文

今年の三月初旬、石河幹明氏の許へ、中津の川原田重治氏から、珍しい文書が送り届けられた。

それは、半紙數枚に毛筆で細かく認めたもので、末尾に「萬延元年五月、福澤諭吉」と記してあり、本文の記事はアメリカ及びハワイの見聞録である。

川原田氏は元と時事新報の中津通信員で熱心な福澤先生の文獻涉獵家で、現在は大阪朝日新聞の中津通信部を擔當してゐる人であるが、同氏の報告に據れば、此文書は最近、中津市商工會議所會頭岩田虎藏氏方に保管する横山家の古文書中より發見したもので、岩田氏は、往昔山口半七氏（舊中津藩士、義塾に學ぶ）と共に末廣會社と稱する製絲會社の創立に盡力した横山

武吉郎氏（舊中津藩士）の三男で、福澤先生とは昵懇であつたといふことである。そして、岩田氏は若し此の文書が福澤先生の自筆であるならば中津の福澤記念館に寄附したい意向であるから、其の點を鑑定して貰ひたいと依頼して來たのである。

石河氏の鑑定の結果は、筆蹟は先生の自筆とは認め難いが、記載の記事は先生の書かれたものと思はれるといふことであつた。

如何にも其の文書を見ると、書體は甚だ稚拙でところ／＼判讀に苦しむ文字もあり、且つ明かに誤記と認められる箇所も見えて、先生の自筆に非ざることは明かであるが、記事の内容は「福翁自傳」所記の事實と

もよく符合し、又その文體より見ても先生の手に成つたものであらうと思はれるのである。

思ふに、先生が第一回米國行より歸朝せられて匆々、中津藩の役人の一人か若しくは藩廳にでも差出された文書を傳寫したものか、又或は先生が自から草稿を作つて塾中の書生に寫させてこれを贈つたものではなからうか。

いづれにしても、此文書は先生の第一回米國行に關する重要なる新資料と考へられるから、左に其全文を紹介する次第である。

(本文中□は原本に於て判讀し兼ねた文字。傍に？を附したものは推讀した文字。其他誤字と思はれるものも總て原本のまゝとし、傍に正字と推定されるものを小活字で附記しておく。尙ほ原本の變體假名はすべて普通の假名に改めた。)

一 今般御軍艦咸臨丸正月十九日浦賀港出帆二月廿六日初て着□仕込地は北亞米利加合衆國「キヤ

リフアルニー」の内「サンフランシスコ」と申港に御座_ハ右「キヤリフアルニー」十三ヶ年以前迄は「メキシコ」領に有_レ之_ハ處一千八百四十七年の戰に「メキシコ」の軍敗北し遂に合衆國に押領被致_ハ「サンフランシスコ」も其節より相開_レ開港以來僅に十一二ヶ年位の新港に御座

一 氣候は大低_ク

本邦長崎に等しく冬分雪抔降_ル事は稀成よしに御座_ハ

一 人口六萬餘尤近年相開_レ港に御座_ハ得ば古來より其地に住來_ルの者は一人も無_レ之_ハ大低_ク「ニウヨルク」「ボウストーン」其外鷗羅巴諸洲支那より入込_ル者共商賣いたし居申_ハ

一 市中町造りは十字正法にて町幅も廣く凡十間餘も可有之町の中程には板を敷車馬の路に致往來の人は兩側の軒下を通行致_ハ

一家造りは都て石室にて四階五階稀には七階位も見受の事有之の室内四壁天井共白塗に致し板敷には「カーベット」と申織物か念入の處は天鷲絨杯を敷大低十五六疊位の間毎に幅三尺五寸長六尺餘の硝子窓二ヶ所所在之の都て彼國は大造の家造致の風俗にて「ニウヨルク」などは十二三階の家を一軒の普請に五十萬「トルラン」餘も費申の由に御座

一街路の兩側には瓦斯燈を投げ往來の人焼灯を用ひ事無之家内には間毎に瓦斯燈を曳き火を點し油蠟燭杯一切用ひ不申の尤瓦斯を焚き本は市中に壹ヶ所有之大造の構にて日々石炭を燒居申

一衣服は男女共筒袖にて女は腰より下丸き袴の如き裾廣き物を着し居申

一常用食料は「フレツヅ」の米牛肉魚類「ジャカタラ」芋杯も相用申

一諸色都て高直

本邦の物價に比較致へば平均七八倍の直段にて可有之米杯は一升に白銀拾五〇餘に相當申尤「サンフランシスコ」は近傍に金坑有之年々夥敷金銀を掘出し自然融通宜敷物價も高直にへ共「ニウヨルク」「ウハシントン」杯は夫程の事も無之由に御座

一「コーチュ」申四輪の車大小數種有之二馬或は四馬を駕し乗組六人八人より最も大成物には十五六人二十人も乗るべき大さにて商貴富商は大低此車に乗り往來いたし本邦駕籠の代用に致

一市中にて荷物運送致には車に載せ馬に曳せ申の馬の背に負せ又は人力にて荷ひ杯致の事は一切見請不申

一都て力を費し事業は悉く蒸氣仕掛に致木挽金物製作通用金鑄立砂糖製造麥粉を碾りも蒸

氣機關の仕掛に有之

一 蒸氣船は最多く軍艦測量船諸方渡海船港内引船

□舟等一切蒸氣仕掛に致し有之渡海船は晴雨に不拘毎日數艘仕出申_レ大形の船には人數五六百人も乗せ申_レ

一 御船航海中損所有乏御修覆として三月四日「メ

ールアイラント」と申海軍局へ御廻しに相成申_レ「メールアイラント」□□「サンフランシス

コ」の東北七里許「サンフランシスコ」灣内の

小島にて一千八百五十五年第二月より初て相開

ル場所に御座ル器械製作所長さ二十間幅六間斗

りの石室五ヶ所有之掛り役人十一人にて夫々請

持の役相勤る也右海軍所是迄相開惣入用三千萬

「トルラン」を費し_レ由にて目を驚し_レ構に御

座

一 咸臨丸御修覆に付「ヅライトク」と申物へ上

せ船底相改申_レ「ヅライトク」の仕掛は悉敷

圖面にて無之ては相分兼_レへ共機關の趣意は

大ひなる木箱に水を盈たし水底に沈め置船を其

眞上に引寄蒸氣仕掛にて箱内の水を驅り出し箱

の浮に徒_レ船底共に水面に現出致_レ右に付如何

様大成軍艦にても船底相致_レに荷卸しに及不申

レ此節咸臨丸を「トク」へ上せ_レ節も大炮其

儘諸荷物共一切卸不申乗組人數も其儘船中に居

申_レて少の動搖も答不申_レ

一 閏三月十二日御船修覆出來に付「サンフランシ

スコ」へ下り同十九日同所出帆四月四日「ハナ

ルラ」と申嶋に著致し_レ

一 「ハナルラ」は「キヤリホルニー」の西千五百

里斗日本東二千里餘の所に御座ル島國にて亞米

利加英吉利の支配を請_レへ共全屬國と申にも無

之獨立の國にて「ハウハイ」府と申政府を構

へ有之

一 「ハナルラ」島の近傍に小島數個有之惣稱して

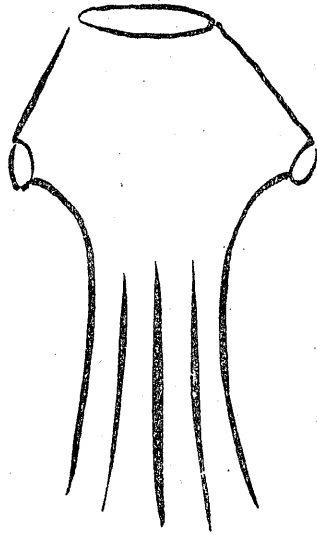
「サンドウキチユ・アイラント」サントウキチユ 諸島の義と唱

へ申ひ右嶋々は不毛の地多くひへ共本地の廣は諸島合して一里方面三百個斗も可有之ひ

一氣候は餘程暖氣にて極寒六十貳度極暑八十五度雪抔降事無之由に御座ひ

一人種は黑人にひへ共全く「アフリカ」人の様子にも無之「モンゴル」人と「ネーグル」人との間に有之ひ

一男女共跣跣にて男子は筒袖婦人は圖の如き物を着し申ひ



一人物極て鄙陋全く白人に制せられ島内にて賣買

萬延元年米布見聞に關する報告(富田)

抔致しひ鷗羅巴亞米利加支那人のみにて土人の店をひらきひは一ヶ所も無之

一常用食料は水芋の如き物を湯煮に致し搗き碎き糊の如くなし魚類獸肉等取り交へ相用ひ都て食事致ひに指にて撮み食ひ箸ヒの類一切用ひ不申ひ

一近來は追々文字も開土人も童子にて英書を携へ學校へ出入致ひ者夥敷有之ひ

右は今般「サンフランシスス」ト私滞船中より「ハナルラ」滞船の節見聞仕ひ處極々荒増申上ひ尙又追々委敷紀行相認ひ積りに罷在ひ滞留中英國の評判抔も承りひ義御座ひへ共此儀委調は口上にて可申上ひ以上

萬延元年五月

福澤諭吉

これが川原田氏送致の文書の全文である。鎖國何百年の後に初めて海外の地を踏んで、見聞するところ悉く奇異の感に打たれざるはなかつたであらうと思はれるのに、此見聞録を見て先づ驚かされるのは、先生の觀察の如何にも緻密なることである。

その觀察の仕方が桑港でも布哇でも同じやうに、其地の歴史、政治の状態より人口、面積、住民の種類と其生活状態、文明の程度等について記してある點は、歐羅巴巡遊の後に著はされた「西洋事情」の編述の體裁を思ひ合せて、特に興味の深いものがある。

勿論先生と雖も、初めて外國の文物に接したときには随分お上りさん風を發揮したことは、「福翁自傳」で先生が詳細に告白してゐる通りで、馬車を見ても最初は乗物といふことがわからなかつたこと、絨氈の敷き詰めてあるところを恐るゝ麻裏草履で履んで通つたこと、豚の子の丸煮が食膳に上つて膽を潰したことなど、様々の失敗談や骨髄談が記してある。建物の石造

であつたことも餘程珍らしく感じたものと見え、同行の長尾幸作といふ人の日記に、福澤先生が魚のテンプラを揚げようとして鍋を倒し火が移つたが大事に至らずして已んだことを記して「我皇國風の家なれば既に大火に及ぶ所、石室の故、更に其患なし。滿室仰天、且一奇、大笑す」と書いてある。

茲に掲げた文書の末尾に「追々委敷紀行相認め積り云々」と記してあるが、其紀行を若し先生が本當に認めて何處かに残つてゐるとすれば、これ亦是非見たいものである。